

High-Tech "NAGAYA"



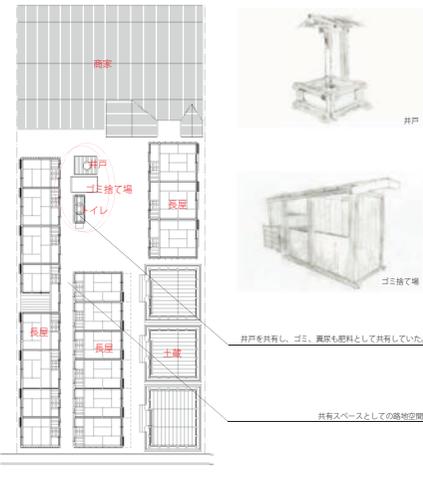
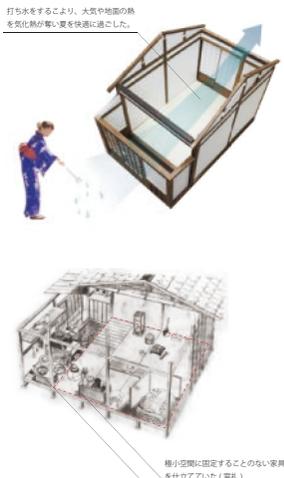
背景 - 前近代から -

私は、これまで前近代に着目し、近代化していないブータン王国の実態調査や日本の前近代である江戸についての調査を行ってきた。前近代は、個々の地域で入手しやすい資源選択をし、施設から施設維持までのエネルギー消費が少なく、持続可能な環境依存を行うものがほとんどであった。さらにブータン王国のリサーチで心に残ったのはそこに住む人々の笑顔であったし、江戸の生活はうらやましい、住みたいと思うほどであった。こうした調査を手がかりにブータン王国では伝統文化を継承するための提案、江戸については長屋に存在した室礼（しむらい）を利用しコンパクトでありながら住居の機能を多く内包する仮設住宅を提案してきた。前近代のコミュニティ形成やエコロジカルな生活は現代においても多く学ぶべきであると感じている。90年代後半以降、中国、インドをはじめとするG20諸国が伝統と近代化の過程に入り、世間では35億人が近代生活を送るようになった。しかし、こうした過程では前近代の建物を近代化することの必要性は理解されない。近代建築は均質空間問題や人工環境問題などといった問題を60年代をはじめとして多くの指摘がなされた。それらの欠陥は前近代の90年代以降に薄らしたことで20世紀初期の数十年前の影響をもたらすものとなり、小さな事柄とは言えなくなっている。アジアの中で最初めに近代化した日本は建築だけでなく暮らしの近代化もたらさずさまざまな欠陥をその他アジアの地域に提供していると言っても過言ではない。これらに対し答えと見做される提案を日本から多く指し示さなければならぬと感じる。

計画主旨 - 江戸から学ぶ現代の集合住宅 -

日本の近代化の象徴である東京において前近代から学ぶとは、おのずと江戸が思い浮かぶ。特に環境面や共同生活面において優れた江戸の集合住宅「長屋」を中心とした建築美に始まり暮らし方までを再解釈することで、高層化におけるコミュニティの喪失、様々な問題を抱える現代集合住宅への応答が可能である。これを東京における現代の集合住宅「High-Tech "NAGAYA"」へと発展させることで近代の抱える諸問題を解決した計画をすすめる。

江戸の長屋の再解釈
 「室礼（しむらい）、種小空間」 → 食糧分庫を算入したLDK形式の居室を減らした環境増進の軽減、空間的な無駄の軽減
 「坪庭、打ち水」 → 夏熱せられた空気を上部に送るための坪庭空間と気化による自然冷却のための水盤の配置



選定敷地 - 月島 -



Context A: 周辺環境を考慮しない大規模開発
 Context B: 大中小の高低空間

東京都中央区、月島を計画敷地とする。月島駅前の高仲通り商店街を中心とした敷地は、明治時代から続く長屋が揃ってあり、暮らす目的に伸びる細い路地に沿うように、開口2.7mほどの細長い住戸が密集している。元々集合住宅として利用されていた長屋は4畳半が基本となっており、現在の住宅と比べると極端な高層密度の密集を遂げていることがわかる。しかし、高仲通り商店街から長屋の足高路地を抜けると再開発による巨大マンションが次々と建設され、月島と月島高層ビルは車のスカーンに大きな差があり、無計画な開発が行われていることが分かる。これらのことから本計画を計画敷地に設計する意義があると考える。

Context B: 大中小の高低空間



Program - 集合住宅と商業施設の複合 -

住宅において1960年代に始まった1住戸=1家族システムは現在では有効に機能していない。高齢化社会の中で1人暮らしとなったおじいさんおばあさんは現在1住戸=1人で暮らすケースもある。さらに建築においても住宅密集地では顕著な空き家、空き地、空き家化などの問題を起こしており、さらに深刻になることが予想される。また、若者を中心にシェアハウスをする人たちがあふれるなど、現在の住居事情は今後において懸念のものではなくなっている。そこで200人の住人をひとつの共同体として集合住宅を計画する。これまでの1家族としての生活ではなく200人の中の相互関係を中心とすることで上記問題の解決と現状に合った暮らし方ができると考える。また、計画敷地が商店街の一部であることから居住する200人が敷地外に利益をもたらすようなプログラム（大浴場、貸し店舗、飲食店など）を仮設し入居者が運営、管理する仕組みを取る。



1960年 1住戸=1家族



現在 1住戸=1家族の破綻

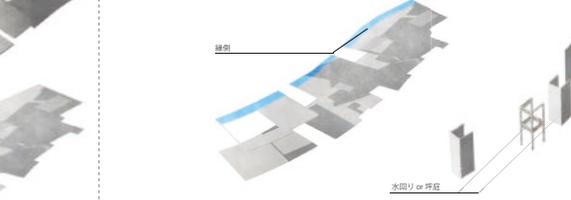
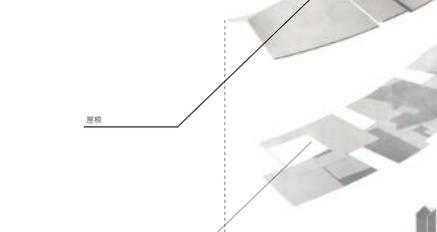


20XX年 共同体での生活

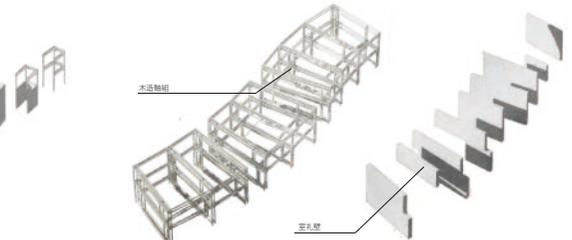


全体構成

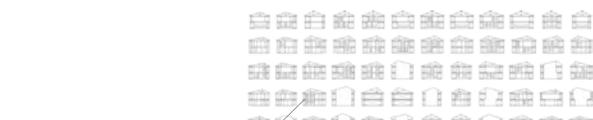
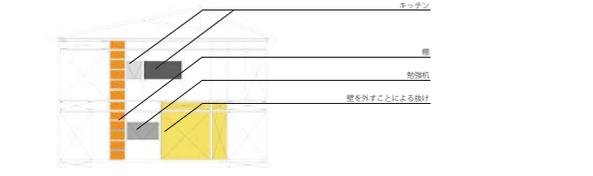
最大で全長約30mからなる6つのVolumeを計画しは全体を構成する木造の軸組からなる。この軸組は、活空間を取り入れた「室礼室」、シェア時に敷を構成となる水回り、取外し可能な梁を埋め込んだ床を一枚し込み、月島の昔から続く水運文化を表現した屋根をのせることで全体が構成される。

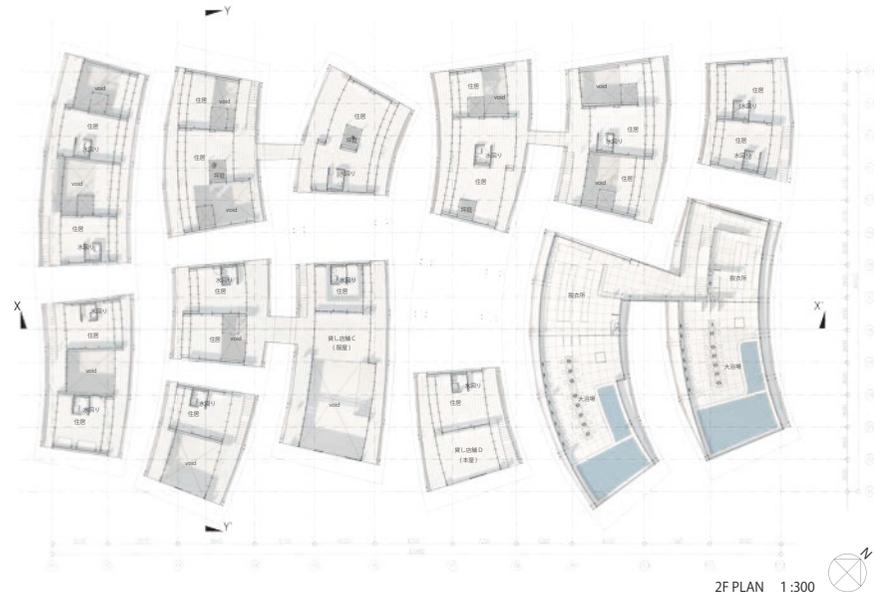


縁側十坪庭
 庭園、美術、音楽、演劇は「間」の芸術であると言われる。日本文化において認識の根本となっている。我々は給食における余白、舞臺における停止などを「間」と呼び、時間と空間を渾然一体として感じることが「間」というものの特徴である。京都の長屋「町家」には坪庭という空間がある。これは室内の隅の隅から空間を室外に溢れさせることで同時にこの空間を庭

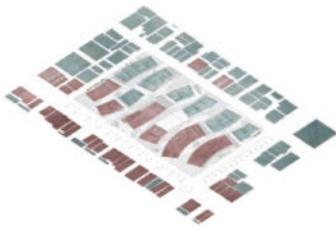


木造軸組十室礼壁
 江戸時代一般家庭の住居である長屋では、たった六畳 (9.93㎡) の住空間に家族で住んでいた。このことが埋り立つ理由に室礼という伝統生活様式がある。長屋の居住者は、収納庫、梁、和服、布団、椅子などおぼろげに固定することのない家具を長屋の中で住居機能の必要性に応じて展開させることで使いながらも生活を営んできた。また、この室礼は、空間に

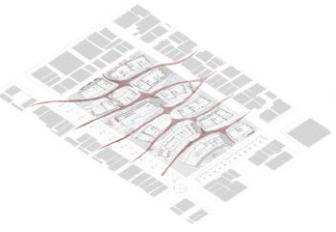




配置計画-共有することによるコミュニティ-
 月島の特徴でもある並列した路地空間を本計画では宜しい形で行うことで各戸と屋外空間をダイナミックに連続させている。江戸の長型においても屋外は単なる通路ではなく人々がシェアしながら利用し得る生活空間でもあることから配置計画において重要な役割付けとなっている。総行させることにより各戸間に大小の空間ができ、そこに連続する縁側空間やたまりを設け、それら路地空間を敷地外に拡ぶことで、シークエンスが多く自由なアクティビティの起こりやすい計画としている。



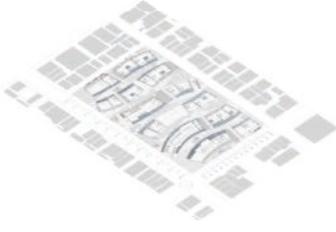
「周辺環境に合わせた Program Volume の配置」
 月島もんじゃストリート「西仲通り鳥店街」沿いには住人が管理、運営を行う商業施設を想定し、その裏側に広がる長型を初めとした集合住宅の Volume に合わせた計画をする。



「路地と路地を視線で繋ぐ」
 月島の住宅密集地の区画には細い路地が通っている。これら区画に連通する下それぞれ路地の視線を総行させ視線が結ぶことにより本計画敷地とその他の場所とを結ぶ。



「たまりをつくる」
 周辺路地を結ぶ動線に対したまりをつくる。たまりは商業施設や入居者のアクティビティの広がる場所となり、野外レストランとして利用できるなど敷地内に引き込む要素となる。さらに通風面でも優れた効果をする。



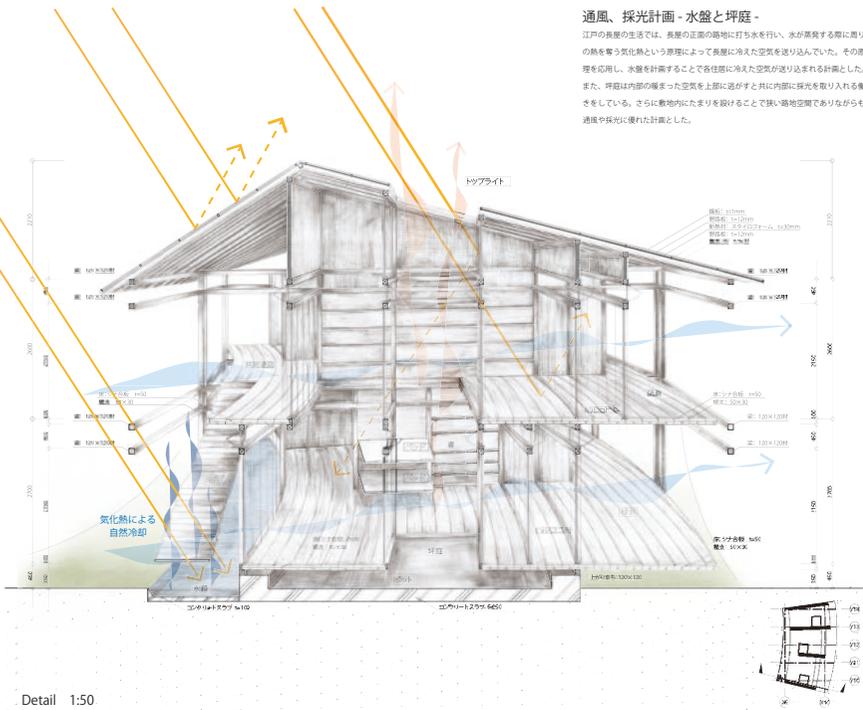
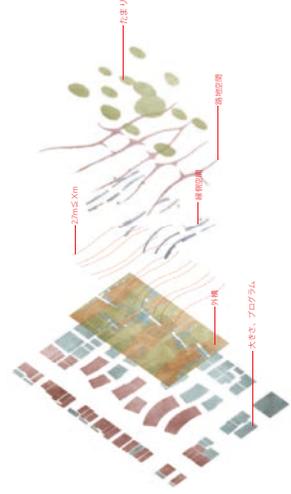
「路地に面した縁側空間」
 本計画の住居ではプライベートのための「Y」コート、その外側に縁側空間を設けている。縁側空間は隣家で共有することができ、周辺敷地に住む人も利用できるコミュニティースペースとなる。



「路地の間隔 [2.7mSxM]」
 現在の月島の路地幅は「1.2m~2.2m」と大変狭くなっており住環境・防災面において問題がある。そこで、防災面をクリアにするために、衛潔誘導化計画に依り路地幅を「2.7mSxM」とする。

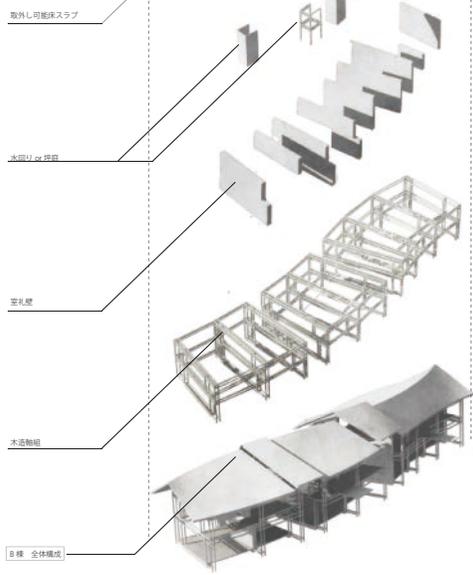


「6つの素材からなる外壁計画」
 本計画の外壁計画には6の素材「芝、水盤、タイル、石板、玉砂利、木々」を用いている。歩く、立ち止まる場所にはタイルと芝を計画し、タイルと芝に沿うように玉砂利、水盤が計画される。木々は奥行きを感じさせ、石板はそれらを結ぶ役割をする。



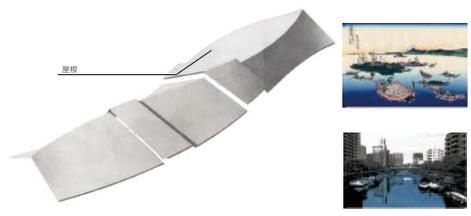
通風、採光計画-水盤と坪庭-
 江戸の長型の生活では、長型の正面の路地に打ち水を行い、水が蒸発する際に周りの熱を奪う気化熱という原理によって長型に冷えた空気を送り込んでいた。その原理を応用し、水盤を計画することで各住戸に冷えた空気を送り込める計画とした。また、坪庭4坪の暖まった空気を上部に送らすと共に内部に採光を取り入れる働きをしていて、さらに敷地内にたまりを設けることで狭い路地空間でありながらも通風や採光に優れた計画とした。

Detail 1:50



物を立てることにより機能を展開させる。すなわち、わいわいとして空間は出来事から生じていたと考える。「もの」のこころがある」といった日本伝統の考え方もこうした物のあるい、つきあひから生じてくるのではないかと感じる。

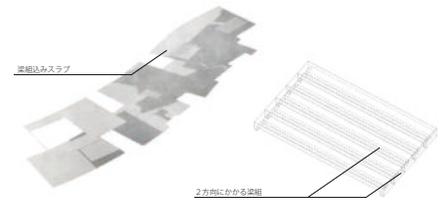
本計画では各住戸に付属する水廻りユニットが、左右逆置、また上下階でのシェア網に変われない場合併設して利用できる計画とした。狭くなった空気を上部に通し、常に新鮮な空気を取り入れることができる。さらに縁側はプライベートのためのバリエーションを手前につけることで、より縁側空間での自由なアクティビティを行うことのできる計画とした。



屋根
芸術の分野で言う「見立て」とは、対象を他のものになぞらえて表現することである。別の言い方をすると、何かを表現したい時に、それをそのまま描くのではなく、他の何かを示すことによって表現することである。日本の様々な芸術で、この「見立て」の技法が用いられている。日本庭園ではしばしば（あるいはほとんどの場合）なんらかの「見立て」の技法が用いられる。たとえば枯山水では、白砂や小石（の文様）が「水の流れ」に見立てられる。その「水の流れ」が風景を表しているともされる。日本庭園では庭を宇宙に見立てている、とも言う。

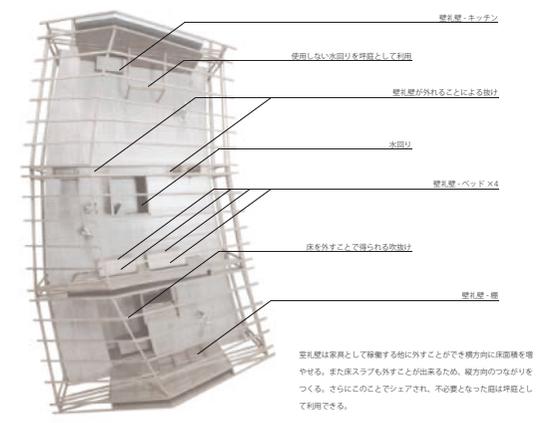
本計画では屋根を中心とした形態のイメージに「見立て」を用いる。江戸時代に葛飾北斎の描いた葛屋三十六景にある月島の風景と現在の月島の風景から共通する水溜と河川の様子を見立て、建築物として利用する。

本計画では1住戸を水廻りユニットを含め20㎡以下と想定し、見屋に固定することのない家具を住機能の必要性に応じて1ルームに展開するといった空孔の持つ働きを壁として収めることで椅子や机で生活する現代の暮らしにも対応できるものとした。また、この壁は住戸間で取り外しが可能であり、シェアハウスなど現代の新しいコミュニティなどにも対応できる計画とする。

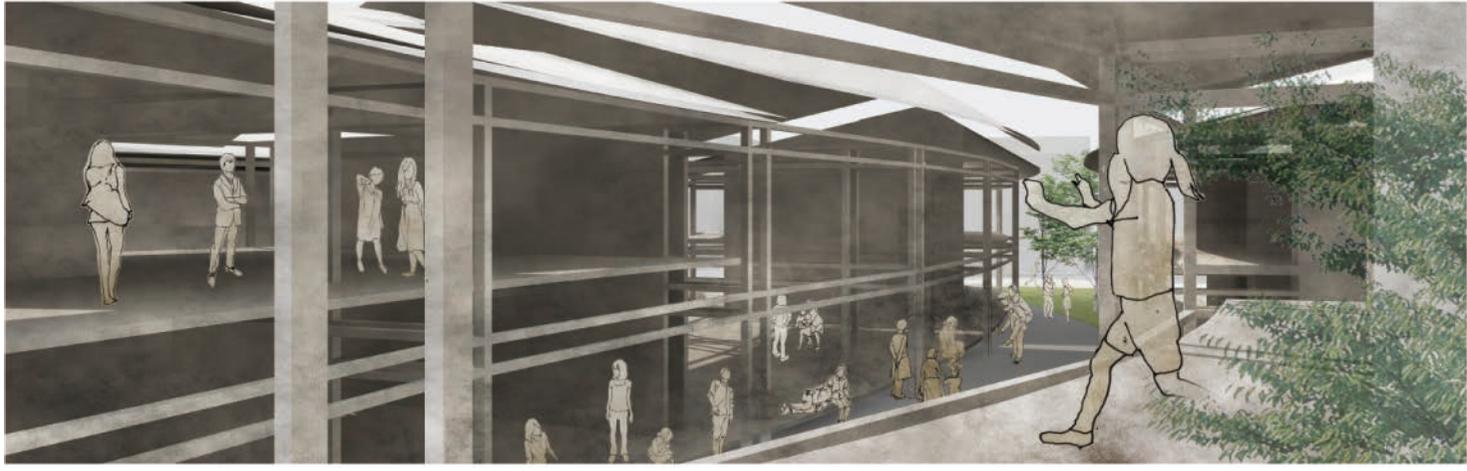
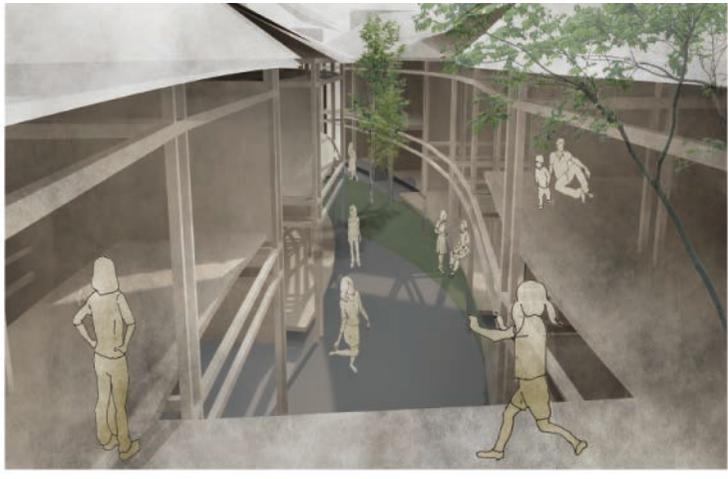
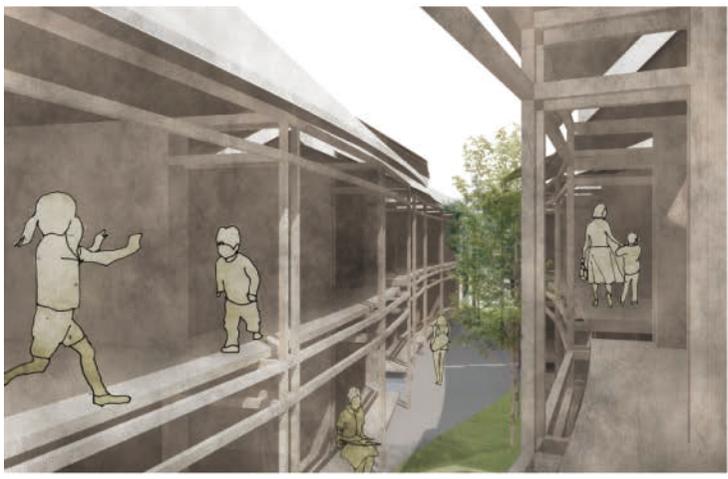


梁組込みスラブ
西洋建築が空間を修瓦によって「付加」していく構造であるのに対して、日本建築は空間を柱によって「分割」する構造によって空間を生じていた。また、柱によって分割される床の上では物を中心として出来事起こる空孔によって、壁のような強い境界は生まれず、周辺を囲む境界は、簾、障風、障子、そして格子のような薄く、外部との連続を切り離さない弱い境界となった。

本計画ではこの日本の境界がつつ分割方法を床スラブで使用する。壁は空孔壁より1住戸の床を広げることができるため、床においても床面積を広げられるようにする。床スラブ自体のx,yをそれぞれ2方向に床を囲むことで取り外し可能な床を再開する。このことで入居者は自由に上下階を繋ぐことができ、メゾネットにして上層を書斎にするといった様々な住み方を可能にする。



壁孔壁は家具として移動する他に外すことができ機方向に床面積を増やせる。また床スラブも外すことが出来るため、縦方向のつながりをつくる。さらにこのことでシェアされ、不必要となった層は坪数として利用できる。





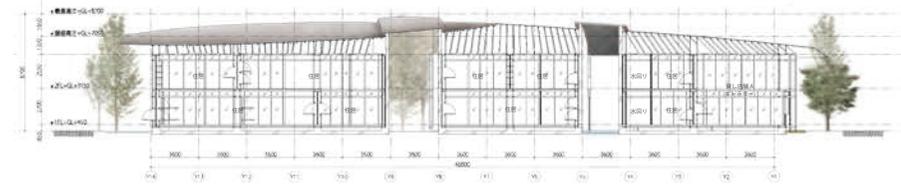
Southeast Elevation 1:200



Southwest Elevation 1:200



X - X' Section 1:200



Y - Y' Section 1:200

